

機械での染めとは違う柔らかな線

シンボルとしての旗

旗振り役といえば、先頭に立って先導する人を指しています。錦の御旗は幕末に官軍（天皇）が掲げた旗で、現在では誰も文句をつけることができない名目、といった意味で使われます。旗はたんなる目印ではなく、集団や何らかの目的を遂行するための大切なシンボルです。旗の語源は仏を供養するために用いられたサンスクリット語のパターカーだといわれています。

単純な目印であれば、色のついた布切れでも十分かもしれませんが、旗は布地に絵や文字、あるいは図形などを描くことでシンボルとしての役目を持たせています。旗は国旗や商店でのセールなどに使うのぼり幟のように、一度に大量につくられるものと、団体の旗や優勝旗のように、一枚しかつukられないオリジナルなものもあります。

一度にある程度のまとまった数をつくる場合にはなせん捺染をおこないます。一般にいうプリントのことで、布地に型紙を乗せ、その上から染料を引いていきま

す。全くのオリジナルの場合は1本ものと呼び、絵や文字を全て手で描きます。

この時、色を乗

せない部分はモチ米を原料にしてつくられた防染糊を使います。1本もの場合は下絵描きから始まり、防染糊を水で洗い流し、染料を定着させ発色させるなど最低でも7工程ほどの作業を行なうため、完成までには1週間ほどかかります。



大量生産できない小ロットの製品に対応

愛知岐阜三重静岡旗染業組合連合会のうち、愛知県内で活躍しているのは約20軒です。戦前にも任意団体としての組合はあったようです。戦争中から戦後しばらくは布地や防染糊の原料となるモチ米などが統制品のため入手できず、仕事が思うようになりませんでした。仕事量が回復したのは昭和25年に開かれた国民総合体育大会（国体）に応援旗など

が使われてからでした。その後、不況のときは商店が売り出しなどに力をいれようと、幟などの注文が増えました。ところが最近是不況のときは経費削減で旗染の需要も減る傾向にあります。

機械を使わないということは小ロットの需要にも即応できるということです。意外なところから需要を掘り起こすことができるかもしれません。



DATA ■愛知岐阜三重静岡旗染業組合連合会

所在地：緑区鳴子町1-57 溝口旗店

・昭和37年：愛知岐阜三重静岡旗染業組合連合会設立